



情報誌

FAR

38 号

事務局：公益社団法人 日本放射線技術学会事務局内

〒600-8107 京都市下京区五条通新町東入東鋸屋町 167 ビューフォート五条烏丸 3F

TEL:075-354-8989. FAX:075-352-2556/http://www.jsrt.or.jp. Email:office@jsrt.or.jp

《ごあいさつ》

FAR会の絆

副会長 速水 昭雄



2014 年の新しき飛躍の年を無事迎えることができました。

昨年は念願のオリンピックの開催地として東京が決定し、新たな日本の発展に大きな目標ができ、何となく落ち込んでいた経済情勢にも変化の兆候が見えてきた年でもあります。

第 70 回技術学会総会は 4 月 10 日～13 日に渡り、江口陽一大会長の基に横浜で開催されます。今回の JRC のメインテーマは「Face to Faces, Face to Communities, Face to the World」であります。

この Face to Communities を「つながる」と表現しています。

ここで思い出すのは日本語表現として何となく死語化していた「絆」という言葉が東日本大震災の助け合いの表現として、日本中で流行語のように使われたことです。誰が言い出したのか知りませんが、被災地の復興にかけた日本人の繋がりをこれほどの確に表現出来る言葉はないと思います。

さて、私達の FAR 会も発足以来、早 13 年を経過し、FAR 会としての立場とその活動も定着してきたと感じています。私達 FAR 会の「絆」は何と言っても放射線技術に関連する生涯における共通のつながりであり、放射線技術学会の学術大会が毎年行われる限り、このような機会に FAR 会員の親睦を図れることは大変喜ばしいことです。最近では長年学会で活躍されてきた先輩が参加できなくなることや突然の訃報もありますが、常に新しい仲間を迎え、会としての絆が深まり活性化していることは何よりも素晴らしいことであると考えています。

ところで、春の総会は横浜に定着しており、横浜のことは良くご存知だと思いますが、FAR 会だけに参加される方に新しい横浜の魅力的なイベントを紹介致します。それは昨年の 2013 年 6 月にオープンした「MARK IS みなとみらい」館です。場所は「みなとみらい駅」と直結しており、学会場のそばにあります。私が推薦するのはこの建物の 5F にオープンした「世界初の自然をテーマにした体験型エンターテイメントパーク」であります。内容は BBC が世界中で撮影した 50 年分の自然映像とセガが開発した最新デジタル映像技術が生み出す新しい表現方法を体験できる施設であります。ここでは 8 つの大小様々な会場での映像表現があり、全部を鑑賞するには 2 時間ほどかかりますが、私が一番感動したのは 40 m×8m の巨大スクリーンによる大自然の映像であります。FAR 会に参加される前に時間があれば是非楽しんで頂きたいこの場を借りてご紹介致します。

内 容

1. ごあいさつ 副会長 速水昭雄
2. 第 70 回総会学術大会へのお誘い 大会長 江口陽一
3. 2014 FAR 会 懇親の夕べ 代表幹事 速水昭雄
4. 2013 FAR 会 佐賀の旅報告 富吉 司
5. 会員動向
6. 会からのお知らせ
7. 特集「心に残る写真機（カメラ）」＝その 3＝
 - 1) 「写真と共に歩んだ 65 年」 平塚市 四宮恵次
 - 2) 「ここに残る記憶を写すカメラがあれば」 相模原市 遠山坦彦
 - 3) 「心に残る写真機とその時代の記憶」 鴨川市 速水昭雄
8. 追悼文「西村信男さんを偲ぶ」 相模原市 遠山坦彦
9. JSRT 情報
10. 第 39 号の特集原稿募集
11. 連載《ご当地自慢》「立山黒部アルペンルート ～地鉄・立山駅から室堂まで～」 倉西 誠
12. 編集の小窓

~~~~~  
《第 70 回総会学術大会へのお誘い》

ご 挨 拶

第 70 回総会学術大会 大会長 江口 陽一



日頃より、ご指導、ご鞭撻を賜り感謝申し上げます。この度、第 70 回総会学術大会の大会長を拝命しました山形大学医学部附属病院の江口です。最初に実行委員会のメンバーをご紹介させていただきます。実行委員長は大阪市立大学医学部附属病院の市田 隆雄さんです。どうして山形と大阪のコンビなのかと疑問に思われるかもしれませんが、小生は長年血管撮影に携わってまいりました。その出会いの中で、信頼できるひとりとして常に市田さんの存在がありました。大会長を拝命したとき、迷わず市田さんに実行委員長を依頼いたしました。また、これから紹介する実行委員も市田さん同様、信頼と実力のある方ばかりです。山梨大学医学部附属病院の坂本 肇さん、昭和大学藤が丘病院の加藤 京一さん、山形大学医学部附属病院の大沼 千津さんです。忘れてならないのは実行委員会を強力に支えてくれる JRC の川越 智子さんと三井 幹夫さんです。これらの信頼できるメンバーに囲まれて、楽しく本大会の準備を進めてまいりました。

JRC2014 のメインテーマは『 Face to Faces Face to Communities Face to the World ー向きあう、つながる、そして広がるー 』です。このテーマには、どんなに医学・医療機器が進歩したとしても、まず、患者さんと向かい合い、医療スタッフと向かい合い、チーム医療を進め、患者さんのために、国民のために貢献していくという意味が込められています。この医療の原点は、過去も、現在も、未来も変わるものではありません。

本大会での実行委員会企画を紹介します。技術活用セミナーのテーマを「外科手術・インターベンションにおける医療画像の活用法」といたしました。CT、MRI、RI、X 線検査などの医療画像は診断のみならず外科手術のシミュレーションやナビゲーション、またインターベンションの支援に多く利用されています。CT などによる 3 次元画像は、その豊富な画像情報を利用することにより、安全で確実な治療法に向けて数多くの応用が期待されています。本大会での技術活用セミナーでは、各領域において活躍されている医師の方々から実際に手術やインターベンションで必要とされる画像、シミュレーションなどで求められる 3 次元画像や実践的活用方法などを解説していただきます。

新たな試みとして、2 つの団体との共同企画を行います。ひとつは日本循環器学会(JCS)とのジョイントシンポジウムです。JCS は他職種の学会との相互協力を深め、チーム医療のもとで最適な医療を目指しています。本学会も同様な方針であることから、今回初めて JCS とのジョイントシンポジウムが実現いたしました。

もうひとつは日本サッカー協会(JFA)との共同企画です。JFA が進めているリスペクト・プロジェクト「大切に思うこと」はチーム医療と相通じるものがあります。「チーム医療とリスペクト」をテーマとした共同企画コーナーを ITEM2014 の展示ホールに設けます。また、「人材育成」をテーマとした JRC2014 との合同シンポジウムも行います。2014 年、サッカーワールドカップイヤーに、JFA と JRC が共同企画を組めることを楽しみにしています。

技術活用セミナーや他団体との共同企画を通じて、放射線技術学の視野をさらに広げる機会となることを願っています。

~~~~~  
《2014 年 FAR 会懇親の夕べ》

春の懇親会へのお誘い

代表幹事 速水昭雄

横浜での懇親会のご案内を致します。

春の総会がいつも横浜で開催されることもあり、参加される皆様に何か印象に残る懇親会へのお誘いをし

たいと思い、今年も萩原先生と相談して会場からも近くてゆっくりと懇親ができる場所として、和食会席料理の岩亀本店に致しました。

この店の岩亀（がんき）の由来は、幕末に制定された日米通商条約により横浜に外国人の来港が多くなり、外国人慰安のための遊郭が作られ、その中でも岩亀廊は最も大きく豪華な遊郭であったそうです。今のお店の場所とは離れていますが、近くの岩亀横町には岩亀廊の寮が在った所で、そこには今もその当時のお稲荷様を祭る岩亀稲荷があります。

さて、FAR 会は学術研究をはなれて会員の親睦を図ることを楽しみにしております。たまたま今回の巻頭言で、新しい横浜の案内として「MARK IS みなとみらい」館の紹介をしていますので、もし時間が取れば懇親会の前に新しい映像の世界を楽しんで頂ければと思います。会員の皆様にはご夫婦での参加も歓迎しておりますので、是非とも多くの会員皆様の参加をご期待申し上げます。

記

日 時 平成 26 年 4 月 12 日（土） 開会 18:30（開場 18:00）
会 場 岩亀本店 横浜市西区戸部町 5-177（電話 045-231-7683）
会 費 9,000 円（会員）、10,000 円（非会員）
参加申込方法 情報誌第 38 号同封の申込用葉書（3 月 15 日必着）、または下記メール宛
（ mail address : a2401hayami@kameda.jp）



岩亀本店へはパシフィコ横浜から車ルートで 1.9 km、8 分、
徒歩ルートで 1.2 km、15 分程度

《2013 秋の FAR 会報告》

「佐賀への旅 2013」

世話人代表 富吉 司

10 月 19 日 12 時 45 分 アクロス福岡の学会総合受付付近に 19 名集合。その前に、橋田大会長、中村実行委員長からビール 2 ダース、焼酎 2 升の差し入れをもらいバスまで運んでもらいました。感謝感謝！

予定時刻 13 時にアクロス福岡を出発し、一路杉能舎酒工房へ。福岡市内は、副添乗員の井手口さんの軽妙な案内が始まり、順調な滑りだしとなりました。1 時間ほどで、杉能舎酒工房に到着し、酒蔵見学・試飲をしました。地ビール・焼酎・あま酒など種類が多くありましたが、昼間なので、多く飲まれた人はいなかったようでした。（写真 1）



写真 1

更に1時間ほどで鏡山窯に到着しました。茶碗など結構高価であるのに驚くとともに、外人親子がロクロを回して作成していたのが印象に残りました。宝くじが当たるといわれる島、虹の松原を経由して16時30分頃唐津の「大望閣」に到着しました。

玄海灘を展望できる高台に有り、5階最上階の展望風呂からの眺めは素晴らしいものでした。宴会は、18時から始まり、山田会長の挨拶に始まり、各自の近況報告等飲みながら始まりました。料理は、海鮮盛りで伊勢エビ、あわび、呼び子のイカ等新鮮な刺身に舌鼓でした。途中、副添乗員の佐藤氏の演奏が有り、多才な一面の紹介があり大いに盛り上がりました。私を含め添乗員3名が、仲居さんとの駆け引きで楽しませていただきました。(やり過ぎました。ゴメンナサイ) (写真2)



写真2

10月20日 9時に大望閣を出発し10分程で、呼子朝市場に到着し、40分ほど買い物。アジみりん干等試食が多かったですが、値段はそれほど安くはないと思いました。その後、30分程で、炭鉱王として成功した高取伊好（たかとりこれよし）の旧邸で、国の重要文化財指定「旧高取邸」の見学をしました。能舞台、植物の浮き彫りや型抜きの動物を施した欄間など、いかに金をかけて建てられた建物かを忍ばせるものばかりでした。(写真3)



写真3

おさかな村に立ち寄り買い物をし、お昼は「割烹 丸一」すき焼き昼食で、ビールを飲みながらいい気分のまま、一路博多駅までバスを走らせた。15時に博多駅に到着し、ほとんどの人が降車しお別れでした。お疲れさまでした。

お酒提供 第41回秋季学術大会実行委員会、
山哲男、神澤良明、石井勉、富吉司、佐藤幸光
ありがとうございました。

添乗員 富吉司、 副添乗員 佐藤幸光、 副添乗員 井手口忠光

~~~~~  
《会員動向》

「会員数」 平成25年11月末現在・・・・・・100名（内、名誉会員5名）

「訃報」 西村信男名誉会員：平成25年11月13日逝去（95歳）

《会からのお知らせ》

（1）「2014 国際医用画像総合展」招待券の配布について

2014年4月11日～4月13日までパシフィコ横浜会議センター他で開催される「日本放射線技術学会 第70回総会学術大会」と同時に開催される「2014 国際医用画像総合展」の入場招待券を JIRA のご好意で本会会員用としてご用意頂ける事となりました。

招待券のご希望者は、パシフィコ横浜会議センター内に設置される JSRT 事務局デスクまでお越し下さい。

（2）平成25年度第2回世話人会議報告

平成25年(2013年)10月19日 アクロス福岡会議室にて開催 山田会長以下15名が出席し、以下の議題について討議・審議した。

1. 会務報告
2. 業務報告および収支計算書報告
3. 第2回運営委員会報告
4. 平成25年度事業計画・収支予算計画について
5. 情報誌関係 第38号を予定通り平成26年1月15日に発行する予定等の報告
6. 懇親活動

1. 「2013 懇親の夕べ」会計報告

2. 「2013 佐賀への旅」について

参加者数：19名で計画通り行う。

3. 「2014 懇親の夕べ」企画案

・代表幹事：速水昭雄

・開催日時：平成26年(2014年)4月12日(土) 午後6時30分開宴

・場 所：岩亀(がんき)本店 横浜市西区戸部 5-177

・会 費：9,000円(会員)、10,000円(非会員)

・申込方法：情報誌第38号に同封された申込用葉書で行う。

4. 「2014 ○○への旅」代表幹事の選任

北海道在住の萩原康司世話人に選任した。

5. 「2015 懇親の夕べ」代表幹事の推薦

関東地区在住の世話人より選出する事とした。

7. その他

1. 名誉会員推戴について

規約第4条の定めにより、筒井政光氏(名誉会員番号：10)と高尾義人氏(名誉会員番号：11)を名誉会員に推戴する事とし、推戴状を2014年1月1日付けで両氏にお送りする事とした。

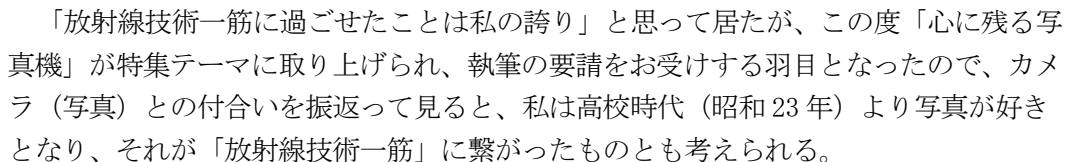
2. 平成26年度第1回世話人会議開催予定

開催日：平成26年(2014年)4月12日(土) 開催時間：(未定)



1) 写真と共に歩んだ 65 年

## 平塚市 四宮 恵次



子どもは練習の帰りに必ずそこで油を売る習慣があった。写真に興味のあった私は、暗室に潜り込み、現像、定着、焼付け、引伸ばし、そしてセピヤ調色、写真の修正まで、私の写真処理全般についての経験と知識になったものと考えられる。

入社後は富士フィルム社の「科学写真講座」に毎週参加させて頂き、センシトメトリーから複写など、科学写真全般の教習を受け、更に、座右の参考書「科学写真便覧」からの実験では、写真の edge effect や低照度不軌（非破壊検査）などのフィルム特性を確認したり、そしてタイムスケール法による増感紙感度の測定など、数々の「増感紙の研究」実務と相まって、私には最高の環境を与えて頂いたことが思い出される。

会社での最初のカメらは、キヤノン 35 mm高級機であったが、専用マガジンに巻き込んだフィルムの装填は、カメラの底蓋をはずして入れる方式であり、空回りして何度か 36 枚を重ね撮りした失敗を繰り返したことは、当時の 35 mm間接フィルムの失敗と共に思い出されることである。一方、複写専門として使ったのが「コニカ」35 mmカメラで、組み立てて取付、雑誌や図書などの上に乗せ、ピントを心配することなく撮影することが出来た。このカメラを東大などの大学図書館に持ち込んで文献の複写に熱中したこともある。

このカメラはスライド作成でも威力を発揮したが、ここで学会発表の経緯を振り返って見ると、当初は模造紙を何枚も使って壇上に持ち込んでいたのが、スライド投影に変わり、白黒フィルムそのまま、リバーサルフィルム、白黒フィルムを缶入りの映画用ポジフィルムに密着プリントしたスライドに変化した、その後はアンモニア発色させて使った経緯を経て、現在のデジタル機器に移行したものと考えられる。

一般撮影用フィルムなどが潤沢に入手出来ない時代、缶入りフィルムをパトローネに巻き込んで使ったり、間接用フィルムで微粒子現像して「何とかならないか」と確認したり、オリエンタル社のカラーキッドを使って発色現像を挑戦したが、狭い暗室で 30 分以上の液温管理は大変であったが、自分で初めてカラースライドを作ったことなど、夢のように思い出される出来事であった。

私的なカメラとしては、当初は 60 mm ロールフィルムを使ったジャバラ式の「コニカセミパール (4.5×6)」から始まり、その後は 35 mm カメラに移行したが、当時流行の二眼レフ (6×6) には手を出さなかった (写真は、蛇腹式カメラの一種「ピース」と二眼レフカメラ「リコーフレックス」)。

欧州に出張した折、現地のスタッフから「何故ニコンを持って来なかったの・・・」、外貨持出制限のあった時だけに「ニコンなら買手は幾らでも居るよ」と言われ、改めてニコン人気の高さを知らされた記憶が蘇える。

平成8年(1996)、JIRA 役職を退任するに際し、有志送別会で拝受した金一封(記念品代)を何に使うか苦慮した結果、若干の手持ち資金を加え、憧れの「ニコン F-4」を手にすることとなった。ニコンのズッシリとした重量感と独特のシャッターは決して忘れられない感触を伝えてくれた。待望の望遠レンズ(35~70 mm、75~300 mmズーム)を駆使し、山や風景、花などの撮影は尽きるところも無かったが、思わぬことに引伸ばし代などが想像以上に掛り、我が財布が悲鳴が上がる状況になってしまったことも事実である。



平成10年頃には、160 mmの望遠可能な「アサヒ PENTAX ESPIO」や、すべて自動化された「キャノン AUTOBOY」などを通常持ち歩いていたが、平成15年に JSRT の委員会で「何故、四宮さんはPCをやらないの。メールでの連絡が出来なくて不便だ」との声を聞き、PC 導入に踏切った次第である。PCの思わぬ利点として、写真のデジタル化とCDへの保管が出来ることを知らされたことで、早速、「ソニー Cyber shot」を購入した訳であるが、何故ソニーを選んだかは、ニコンのNIKKOR レンズへの信頼感と同様に、ソニーがCARL ZEISS レンズを使っていたからによる。(注:私は今でも画素数とレンズの分解能は別で、伝統的なレンズを信用している)



PC とデジカメを使うようになってからは、小冊子の作成(写真の挿入)が容易になったことから「FAR 会 10 周年記念誌」も手作りで作ることが出来たと言える。しかし、ニコン F-4 のシャッター感覚を忘れることが出来ず、平成19年(2007)には「ニコン D-50」を購入したが、それは F-4 の望遠レンズが使えるとの話に乗った訳であるが、今では重いレンズの出番は殆ど無くなっている。



デジタル技術は、PC、デジカメ、メール、CDなどで大いに恩恵を受けているが、余りにも新機種への変換が目覚ましく。既に買換えの意欲を失っている中であって、健康管理の散歩には「二代目の Cyber-shot、ポCKETラジオ、携帯電話」が今でも親しき友として同行している。

(注:昔のことは少々記憶違いがあると思いますが、歳に免じてご容赦ください)

## 2)ここに残る記憶を写すカメラがあれば

相模原市 遠山 坦彦

音楽と会話、声が充満し紫煙が漂う空間、カウンターの上には空のグラスがある。カウンターに両腕を載せ、グラスを見つめている。

顔は見えないが朱に染まっていることだろう。困った顔をしているかもしれない。仲間は帰ろうとするが、彼はカウンターから腕が離れない様子である。その時代、バーで注文できるカクテルと言えばハイボールしか知らなかった。空になった一杯のカクテルが身体を駆け巡り、腕をカウンターに張り付けてしまい、持ち上げられない様子なのだ。

それは、50 数年遡る頃に焼きついたもので、消えてくれない記憶の1シーン、彼が自分の意志でアルコールを身体に入れ、初めて体験した姿である。

このワンショットを記憶の中から取り出して残せるカメラが欲しい。記憶は何かの弾みでよみがえるが、



偶さかの虚像出現である。仲間と話す機会であっても共有できるシーンではない。

初めて使ったカメラは、紙に裏打ちされたロールフィルムで、6x4 サイズに写るものだった。蟹の腹を開けることを想像させる、ジャバラが繰り出る型式だった。何故かピンボケで、修理に出した当初は大丈夫であっても、すぐにピンボケに戻る、という愛すべき代物だった。随分と活躍してくれた時期もあった。友人の写すカメラは鮮やかに写り、私の写真は自然ボケで捉え、風格ある人物像をコサエていた。

その時代には、カメラ上面の覗ガラスに写る相手を見てシャッターを切る、首が痛くなるようなボックスカメラが先端型であった。6x6 のネガサイズだったかな？

私の使っていたカメラはどこへ行ったのだろう。捨てることの嫌いな私の記憶に無い。

京都、河原町通りに面したショウウインドウに飾られた中古カメラを乏しい小遣いで購入したこともあった。すぐに使えなくなったことを覚えている。

中古品が直ぐにダメになったのはショックだった。高知で乗り始めた自動車は、最初が中古で以後に新車が続いたのはこの経験が尾を引いたのかもしれない。

デジカメ撮影で被写体に向けて両腕を突き出す集団を見ると異様に見える。携帯電話やスマートフォンなども同じ風景である。私は左目で見ながら右眼のファインダーで捉えるよう努力している。何の事はない、手元のデジカメ 2 台ともに液晶表示が故障している悔しさを隠す使い方である。

残念カメラの記憶がある。それは記念にいただいたカメラだった。床上浸水 110cm の我が家とともに沈没してしまった。1 時間雨量 129.5mm を挟んで 36 時間に 869mm だったと記録されているが、1000mm 以上だったとの報道もあった。道路に立てば私の頭を越える高さに汚れた浸水跡が残っていた。’98 高知市大水害として高知市民の記憶に残り、県都が水没したのである。その時、過去の写真全ても無くしてしまった。

アルバムが残っていたとしても見返す機会は殆どないだろう。写真は無くても記憶に残るシーンは自由に蘇る。時折頭に浮かぶシーンを取り出せるカメラが欲しい。それも、記憶の消えてしまわない内に。

なぜ再流行か。はるか昔に飲んだカクテルを最近、注文してみた。運ばれて来たハイボールは記憶とは結びつかない味で、二口目を飲むには覚悟を要する水でしかなかった。

むかしの記憶を呼び戻しても甘い味を提供してくれないのかも知れない。こんな昔を書いているのは面白くない。少しは楽しい未来を描いてみたい。楽しく語り、写すカメラを手に入れたいものだ。

### 3) 心に残る写真機とその時代の記憶

鴨川市 速水 昭雄

#### 最初の写真との出会い



それは私が放射線技師学校に入って（昭和 34 年 4 月）、写真化学の講義を当時の梅谷友吉先生が担当され、その実習で初めて本格的なカメラによる写真を撮り、自分でフィルム現像をし、印画紙に焼き付けて写真を製作することを教わりました。それまでは写真機を持つこともなく、すべてが初めての経験であったと思います。それを機会にその後は白黒フィルムの写真に関しては学校や病院の暗室を使って自分で現像することが当然のことと考えていました。しかしその後カラー写真の普及と共にそのような機会もいつの間にか少なくなりました。初めての写真実習ではプロの写真家が使うような先生のボックスカメラで、ガラス乾板に各自の撮影をして、その時に頂いたガラス乾板を今も大切に保有しております。（梅谷先生は、1980 年に逝去されましたが、放射線技術学会の創設に深く関与された先生で、非常にユニークで科学者と言うより発明家という印象で、非常に多くのアイデアに興味を持たれ実用新案や特許を多数保有されていたと聞いています。先生のご遺族から学会に多額の寄付金を頂き、その功績を讃えて技術学会に梅谷賞が作られました。）

#### 初めて使った写真機はヤシカ二眼レフカメラ

技師学校の写真実習では生徒各自が自分のカメラで写真を撮る事になりましたが、昭和 30 年代当初はまだ学生がカメラを各自で持つような時代では無かったと思います。従って私は当時叔父が使っていたヤシカの二眼レフカメラをしばらく借用して、初めて本格的なカメラマン気取りで大阪の中之島界隈で写真撮影し



たのが、初めての写真機との出会いでありました。

その当時の主流のカメラは1眼のレンズカメラで、二眼レフでピントを直接合わせながら撮影ができるこのカメラは非常にユニークで使いやすく自慢でした。その当時使用したヤシカカメラの実物写真（写真1）はインターネットで検索したものです。フィルムは6×6cmのブローニ版と呼ばれていた12枚取りのロールフィルムを使用していました。二眼レフカメラとは、ファインダー・レンズと撮影レンズの2個のレンズが上下に連なっているカメラで、略して二眼レフとも呼ばれていました。その後、自分で働くようになってからは、一眼レフカメラなど色々なフィルムカメラを購入しましたが、せいぜい記念撮影か家族の記録写真を撮る為に撮影をしましたが、本格的な写真撮影や高級カメラを購入することはありませんでした。



写真1

### デジタル時代になって初めて購入したカメラ：カシオ QV10（写真2）について

そんな私ですが、デジタルカメラが出た時は流石に使ってみたくなり、当時世界でも最初の普及タイプのデジタルカメラであるカシオのQV10を購入しました。これはデジタルコンパクトカメラで非常に軽く当時としては画期的な人気商品であったと思っています。

これを持参してシカゴのRSNAにて（1995年）（平成7年）展示機器や見学先の病院の写真を取りましたが、当時アメリカでもデジタルカメラは非常に珍しく、撮影許可の厳しいRSNAの展示場でも歓迎してくれたことは大変良い思いをさせて頂きました。

このカメラが昨年（平成24年）に重要科学技術資料として未来科学館に展示されました。そのコメント記事内容を下記に紹介します。



写真2

この原稿のために久しぶりにQV10を取り出して、我が家の猫の写真を撮ってみました。この写真をPCに転送するためのソフトは当時のPC98のフロッピーデスクで今のPCではダウンロード対応ができませんでした。このカメラの総画素数は25万画素です。

- \* 今回、重要科学技術資料（未来技術遺産）に登録された「QV-10」は、画像イメージを直接確認できるTFTカラー液晶画面をモニターとして装備しながら、コンパクトカメラサイズを実現した液晶デジタルカメラです。

軽く、どこにでも持っていける携帯性に加えて、撮った画像をその場で確認し、失敗した画像は消去して、気に入った画像はパソコンに取り込んで保存できます。さらに従来では考えられなかった手頃な価格（税抜65,000円）により、「QV-10」は爆発的ヒット商品となりました。

それまでのデジタルカメラは報道機関などで使われる高価な業務用機器でしたが、「QV-10」の発売（1995年3月）によって広く世の中に普及し、今ではカメラと言えば銀塩カメラではなくデジタルカメラと言うほどまでにカメラの世界は変わりました。このことが評価されて、平成24年度重要科学技術史資料（未

来技術遺産)に登録されました。

### 「西村信男さんを偲ぶ」

相模原市 遠山 坦彦

訃報は、何気なく転送されてきたメールで告別式が明日 11 月 16 日であることを知りました。花に囲まれ安らかなお姿をお見送りした日は寂しい一日でした。95 歳 ご生涯の冥福をお祈り申し上げます。

思い返すと、西村さんに初めてお目に掛かったのは昭和 34 年 3 月も僅かに残す時期でした。昭和 49 年 3 月に退職されるまでご指導いただいた 16 年間は長いようで短く思い出される時間です。

昭和 15 年 11 月入職され、昭和 49 年 3 月まで勤められた京都府立医科大学附属病院は、明治 5 年(1872 年)に栗田口青蓮院に開設された京都療病院に始まる古い歴史を持つそうです。放射線科は、昭和 3 年 4 月 13 日後藤五郎初代教授就任をもって開講され、今年(2013 年)が 85 周年になります。京都市民から「府立病院」と親しまれ、鴨川と比叡山を望む風光明媚な特等病室を持ち、VIP にも好評を得ていたようでした。何故か「西村さん」と呼ばれる院内の習慣は、昭和 42 年主査に任じられても残りました。戦中・戦後の混乱と物資欠乏の時期、昭和 40 年代の学園紛争に荒れる時期、技師室を率いて乗り越えられた様子を京都府立医科大学放射線医学教室開設 50 周年記念誌(昭和 55 年 12 月刊行)で述べられています。設備の工夫と X 線装置・機材を大切にされ、理に合わないことには厳しい評価を、また、交誼を大切にされた人柄が伺われます。

西村さんは、日本放射線技術学会昭和 44 年度学会長として第 26 回総会を昭和 45 年(1970 年)3 月、京都会館にて主催されました。シンポジウム「自動現像装置と管理」の座長を金田弘教授に委ねられました。自動現像装置が普及し一層の高速化を目指す時代で、高速現像の問題点を浮き彫りにすると共に、問題解決への展望を絞り込んだ、期待に応えるシンポジウムだったと記憶しております。

3 代に亘る教授の信任も厚く、退職お祝いの会で見せていただいた笑顔が素敵でした。その後も京都第一赤十字病院(昭和 50 年～昭和 61 年)、京阪京都診療所(昭和 61 年～)と 83 歳まで勤務され、長年の現役生活を誇りにされていたそうです。その間の功績は、京都府知事表彰(昭和 48 年)、厚生労働大臣表彰(昭和 57 年)、勲 5 等瑞宝章叙勲(昭和 58 年)、日本放射線技師会長表彰(平成 3 年)などで顕されています。この文に「また君かね」と心配いただく顔が浮かびます。膝をカタカタと揺すりながら「ま～ しゃーないか」と苦笑いでお許しください。歴史をしっかり聞いておけばよかった。業者に接する機微、小さな湯呑の美味しいお茶、忘れません。お世話になりました。深く感謝を申し上げます。

そして 永久にサヨウナラ 西村さん

### 《JSRT 情報》

『第 70 回総会学術大会』大会テーマ:「Face to Face Faces to Communities Face to the World」

－向きあう、つながる、そして広がる－

大会長: 江口 陽一(山形大学医学部附属病院)

会 期: 平成 26 年 4 月 10 日(木)～13 日(日)

会 場: パシフィコ横浜会議センター他

『第 42 回秋季学術大会』大会テーマ: Ambitious 2014

－ make the next frontier, make the new future －

次のフロンティア、新しい未来へ 大志を抱いて

大会長: 小笠原克彦(北海道大学大学院保健科学研究院)

会 期: 平成 26 年 10 月 9 日(木)～11 日(土)

会 場: 札幌コンベンションセンター

## 《原稿・作品募集》

【第 39 号特集テーマに対する原稿募集】（5 月 15 日発行予定）

■□■□■□「 私の時計 」□■□■□■

現代社会の生活では、時計（腕時計、柱時計、目覚まし時計、携帯の時計等）は、欠かせないツールですが、会員の皆様の時計に関する思い出（例：初めてつけた腕時計）を纏めて戴き、ご応募下さい。

記

原稿内容：副題（自由にお付け下さい）

原稿文字数：800 字～1200 字（400 字原稿用紙 3 枚以内）

写真：ご自身の写真（半身）文字数に含みません。内容に関する写真及び図表は、1 枚につき原稿文字数から 100 文字を減じて下さい。

写真・図表は、デジタルデータが希望ですが、(JPG、PDF、EXL 等) アナログデータも可。

原稿形式：ワード、一太郎、TEX 等（ワープロ、手書きも可）

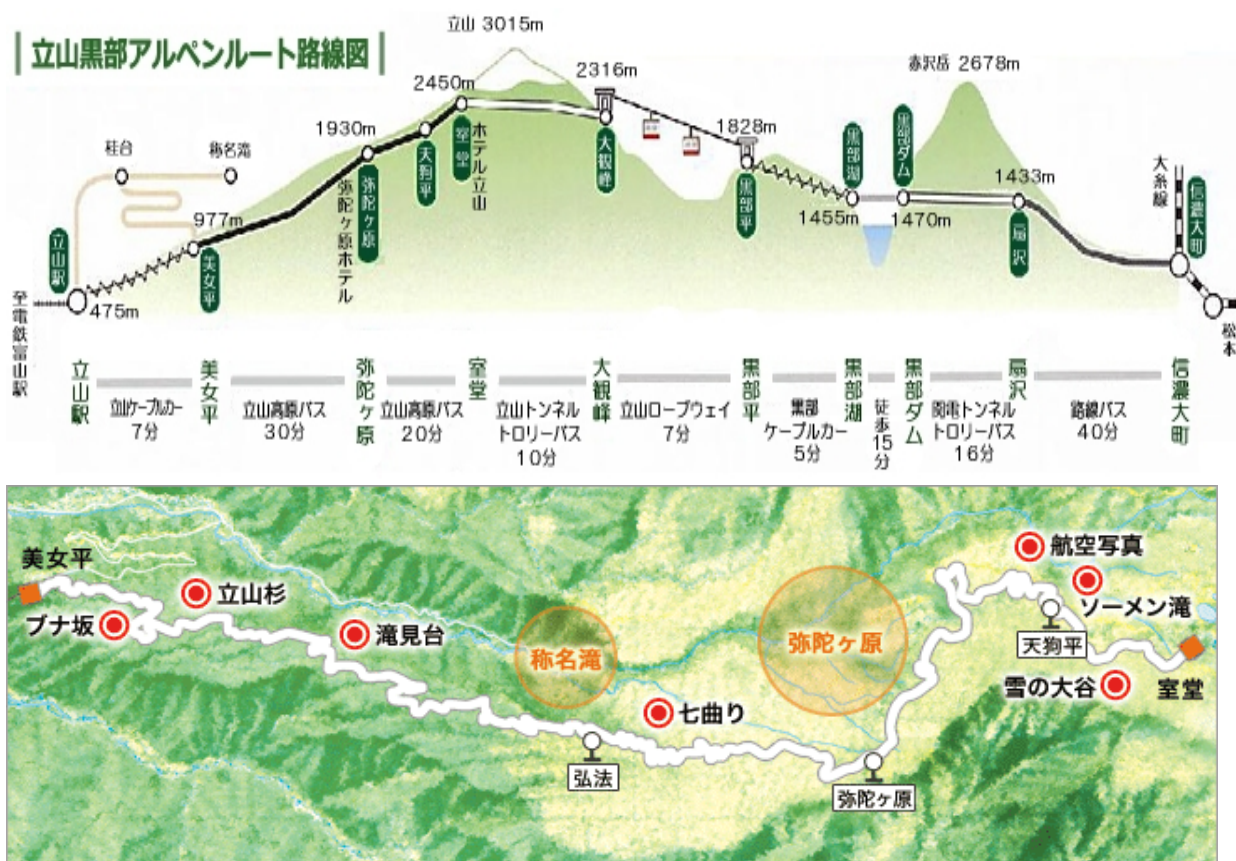
提出期限：平成 26 年 4 月 15 日必着でお願い致します。

送 付 先：森 克 彦 〒350-0064 川越市末広町 1-11-22 宛

E-mail：[mo-katsu@jt4.so-net.ne.jp](mailto:mo-katsu@jt4.so-net.ne.jp) mokamokawh@gmail.com

《連載》《ご当地自慢》「立山黒部アルペンルート ～地鉄・立山駅から室堂まで～」

富山市 倉西 誠



### ◎立山アルペンルート

立山黒部アルペンルートは富山地方電鉄（地鉄）・立山駅を起点とし、立山の弥陀ヶ原から室堂、立山直下のトンネル、黒部ダムを経由して関電トンネルトロリーバス・扇沢駅を結ぶ山岳観光ルート。ただ、地鉄富山駅から JR 東日本大糸線信濃大町駅までとする場合もあります。





立山駅から扇沢駅までは、直線距離では東西に約 25 km 足らずですが、標高差は 1975m もあります。この中の富山県側の桂台から室堂までは路線バスや観光バス、許可を受けた車、緊急自動車しか通行できません。長野県側の関電トンネルは、トロリーバスの専用道路です。

#### ◎ 地鉄・富山駅から立山駅へ

地鉄・富山駅を出た電車は富山市内のビルや家並に続く田園を横切り、約 1 時間で地鉄・立山駅に到着。車両は、一時期、西武鉄道を代表していた「レッドアロー号」も走っており、近々京都と大阪を結んでいた京阪電車の 2 階建て車両（ダブルデッカー）も導入予定。さらに立山駅前には 1000 台分の無料駐車場が準備され、マイカーを受け入れています。

#### ◎ 立山駅からのケーブルカー

立山駅でケーブルカーに乗り換え美女平へ。所要時間は僅か 7 分ですが、高さは一挙に 500m 上がり標高 1000m に到達します。3 月初めでも積雪は 2 メートルもあり、4 月初旬のアルペンルート開通に向けた最初の仕事は除雪です。その模様は写真のように、雨樋を使って雪を下へ流します。5 月初めでも右のように残雪があります。



#### ◎ 高原バスで美女平から室堂へ

##### ・ブナ坂

ケーブルカー・美女平駅で乗り換えた高原バスが、最初にさしかかる場所はブナ坂です。名前のお通り樹齢 200 年超のブナと杉の原生林の中をバスは走り、しばらくすると大きな杉（立山杉）が現れます。このスギは京都・北山杉と同種のアシウスギの一種で、樹冠が丸みを帯び、葉が柔らかく雪が付きにくい構造をしています。



##### ・滝見台

次いで左側の車窓の木々の間に、室堂の頭上にそびえる立山連峰の水を集めた日本一の落差 350m を誇る称名滝が見えてきます。険しい山肌を 4 段に分けて一気に落ちる様子は、遠くからでもその迫力は十分に伝わってきます。

この滝の名前は、立山を訪れた法然上人が迫力満点の滝の轟音の中に、南無阿弥陀仏という称名念仏を聞いたことから名付けられたと云われています。



また、滝壺付近から撮った下の写真のとおり右側に細いながら称名滝より高いところから落ちている滝が見える時があります。これはハンノキ滝と呼ばれる滝で、落差は称名滝



を超える 500m です。ただ、雪解けの季節や雨の後など、水が豊富な時にしか、ハンノキ滝は姿を現しません。そのため、常に水を流し続ける称名滝が日本一の落差と認定されているのだらうと思われます。

・弥陀ヶ原高原バスは高度を上げ、標高 1600m から 2000m で東西 4km ～南北 2km に広がる溶岩台地の高原に到着。古来より立山は富士山、白山と並ぶ神聖な霊山とされ、浄



土山や大日岳、別山などの仏教色の強い地名が多くあります。この高原も美しい高山植物が咲き乱れ、来迎を拝する雄山の前面にあることから、弥陀ヶ原と称されています。弥陀ヶ原が、最も美しい姿を見せるのは、ワタスゲやハクサンチドリ、キヌガサソウ、クロユリ、ホタルブクロなどの高山植物が咲き乱れる初夏のお花畑と、ナナカマドやダケカンバ、チングルマ、ワレモコウ、キンコウカ、イタドリなどが紅葉する秋（10月上旬～中旬）のうっとりするような自然の名画の時です。特にソーマンの滝付近では急峻な山岳風景と相まって織り成す紅葉美は一見の価値がある景観です。

#### ・雪の大谷

立山黒部アルペンルートの全線開通目標の 4 月中旬に向け、1 月末からバス道路の除雪作業が一面の銀世界の中で開始されます。弥陀ヶ原付近は、8m 以上の積雪がある世界有数の豪雪地帯。除雪作業は、雪面のはるか下にある道路を、冬季閉鎖前に立てておいた 8m 超のポールと GPS で探し当てることから始まります。

30t 級の大型ブルドーザーで、道路の上にある雪の表面をカンナで削り落とすように少しずつ掘り下げて道路を出します。特に、弥陀ヶ原上部の「大谷」は地形的に雪の吹きだまりができるため、その深さは 15m を超えます。そのため、雪を掘り下げて、道路を掘り出すと、15m 超の雪の壁が約 500m も続く雪の大谷が出現します。

アルペンルートが開通した直後から 6 月上旬までは、普段はバスしか通行できないバス道路の片側を歩行者用通路として開放し、歩行者も雪の大谷ウォークを楽し





むことができます。この壁の上からは、白い絨毯の向こうに雪化粧した山々の姿を一望することもできます。これも大谷ウォークでなければ味わえない醍醐味です。

夏山シーズンに入ると、さしもの雪の壁も溶け去り、周囲と変わりが無い景色に戻ります。

#### ・室堂平を散策

美女平からの高原バスの終着は室堂です。この周辺は、室堂平と称するなだらかな丘陵で、遊歩道も整備されており、立山連峰(写真右から雄山／大汝山／富士ノ折立)の足元で、劔岳や大日連山を望みながら、のんびりと散策ができる最高のロケーションです。なお、雄山のみを指して立山ということもありますが、立山連峰に立山と称する単独の峰は存在しません。

7月下旬から8月中旬にかけては、天候も安定し、見頃の花も多く、お勧めのシーズンです。ここには、特別天然記念物の雷鳥が多く生息しています。さらに、みくりが池、みどりが池、血の池、玉殿の岩屋などの散策スポットを巡る遊歩道も整備されており、お花畑も堪能することができます。

ただ、夏のシーズンには人が多くなり、地鉄電車やケーブルカー、高原バス、トロリーバスが込み合うことに加え、室堂平の遊歩道でもゆっくりと景色や高山植物を満喫できなくなるのが難点です。



#### 【参考ホームページ】

- ・立山黒部アルペンルートガイド：立山黒部貫光株式会社
- ・立山黒部アルペンルート：立山町観光協会
- ・とやま観光ナビ：富山県観光公式サイト
- ・立山の自然観察：シニア自然大学環境科
- ・立山高原バス～アウトドアと旅：Yahoo ブログ

#### 《編集の小窓》

情報誌第38号(平成26年新年号)をお届けします。  
FAR会員の皆様方には、良い新年をお迎えのことと存じます。  
今年もお健やかに過ごされますようにお祈り申し上げます。

さて、私にとっては、編集委員としての経験が全くありませんでしたので、森 克彦委員長を始めとする他の委員の仕事が早く感心させられるばかりでした。

各先生方の全面的なご指導、ご協力のもとに出来上がりましたものです。まだまだ、未熟な委員ですが色々と気づかない面も多々あるかと存じますが、会員の皆様のご支援、ご協力ほどを宜しく願います。  
(橋本廣信 記)

#### FAR 情報誌 No.38 (非売品)

発行日 平成26年1月15日

発行者 山田勝彦

編集委員会 森 克彦(委員長)

石井 勉 橋本廣信

山田和美

森：連絡先 Tel&Fax. 049-225-2619

Email: mokamokawh@gmail.com